

夜明け前

縣神社 宮司 田 鋏 到 一

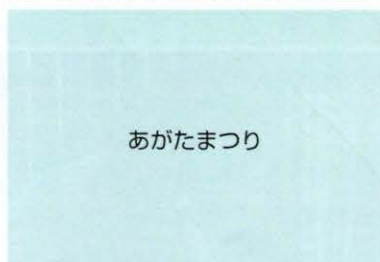
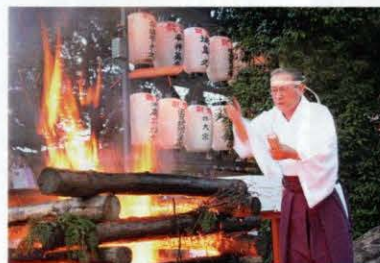
志す道は宇治橋 渡り来て
下居の山に 仮庵しまつる

縣神社に赴任して五十年。その前半分を祢宜として、後半分を宮司として奉職いたしました。皆様の後押しと御力添えにより、ここまで無事に職責を全うすることが出来ました。厚く御礼申し上げます。

縣神社は宇治川兩岸に広がる地域を宇県・宇治県と称した時代に「あがた」の地主神として奉祀されました。それから千数百年を経て、現在の信仰と文化伝統を有する神社となるに至りました。その永い歴史のなかで栄枯盛衰はありましたが、とくに江戸の中頃には人気の神様として急激に参詣者が増え「あがたさん」と称され親しまれてきました。江戸時代の町人階層の勃興に伴う熱烈な信仰による「県祭」は暗夜の奇祭として知られ世上に有名になりました。

しかしながら戦後しばらくして社会状況の激変により縣神社は激動期に入ります。そして平成の御代三十年を半ばにして復古維新の転換期を迎えることとなります。

その平成十六年には「梵天講」が生まれます。これに呼応して「この笛ふくや会」が生れ、「ケロケロ座」が生まれました。またその頃より大幣座の「幣差」の若返りが進みました。





大弊神事



令和に入ると家の子としての「開耶会」も発足します。新しい畑は耕され、種を蒔き芽が出て生長してきました。いずれにいたしましても、この大変革が成就しましたのは木の花会の御支援御協力の賜物と深く感謝いたします。

中執持としての私は神に向い寄り添うというより、むしろ人の方へ向き民の義を務めるようになってきました。それは私が氏子のない神社に奉仕してきたことと、何よりも私自身の生き様に起因していると考えております。



献茶祭

そして、そろそろ次世代へと交代する時機が来ました。縣神社の新しい夜明けです。

令和三年三月

残日庵 慕回処士



木の花桜咲くころ、に思う

総代 堀井 長太郎

今年も宇治で一番早く春を呼ぶ桜、木の花桜が満開を迎えようとしている。

縣神社ご祭神「木花咲耶姫」にふさわしい枝垂れ桜が境内を彩り春の到来を伝えてもう20年の年月は流れただろうか。この歳月の流れの早さを振り返る中、縣神社宮司さん三代、堀井家三代にわたり、私は神社に深いつながり、ご縁を結ばせていただくことになった。

奥村源三宮司と祖父堀井庄次郎は深いかわりを持ち、書院、茶室の建設に力を注いだ。奥村郁三宮司は父堀井信夫と今にある縣神社の姿の基礎を作り、父はその思いを田鍬宮司に引き継いでいただいた。私は奥村郁三宮司とは茶道藪内流入門からご縁をいただいた。父の亡き後、神社にも関わらせていただき、今日の田鍬宮司へとつながる。もう50年前にもなろうか、初めてのお稽古は現在大きなマンションと姿を変えているが、宇治橋通り辻利一本店の屋敷であった。辻家の奥様とお嬢様を交えてのお稽古は、宇治を代表する茶問屋のお座敷で行い、茶道から日本文化の集約、後に自己の趣味につながるものを見つけ、又、お店から宇治茶老舗の風格、というものを学んだ。宮司は「堀井さんは手前だけを練習なされると良い」と言われ、その手前を繰り返し稽古したことが今に役立つ。茶を始めたことはその後の縣神社や平安神宮での献茶式につながり、入江甚之助、辻利雄、堀井信夫歴代総代の介添えとして奉仕できた。

同じく藪内流御家元にも十二代猗々斎、十三代青々斎、現家元十四代允猶斎宗匠の三代にわたりお仕えすることが出来て、その喜びを感じる。

現家元の祖父十二代猗々斎ご夫妻参列の中、初めて茶壺口切の介添えを行いその後茶席で、緊張のあまり、足がしびれ立てなくなったのが思い出される。

書き綴れば、「初あがた」「縣まつり」「大幣神事」「事始め」と四季の行事につながる事が多数あり、その中に神社と関わる自分があるのが嬉しい。

最近嬉しいことが神社にあった。一時姿を消していた「ふくろう」が舞い戻り、ホウーホウーと鳴き声を聞かせてくれる。幸せを運ぶ鳥として境内に住まいしてくれ、この先何時までも縣神社の弥栄を見守ってくれることを願いたい。

県はんへ…エール!

総代 入江 宗輔

私と田鍬さんとの出会いは、五十年前私が高校生の頃だったと思います。その後私は平成五年に総代に任命され、そのまた三年後に田鍬さんが宮司になられました。以来四半世紀の長い付き合いになります。

当時は奉賛会とは上手くいかず、人は神社に寄り付かず、当然ながらお金も無く…。宮司として心を痛め、苦勞しながら頑張ってきたと思います。

今は後援会として木の花会が支えとなり、梵天講は立派に渡御を遂行してくれます。縣神社には氏子はいませんが、今では沢山の『家の子』が集まってくれています。これはひとえに田鍬宮司のお人柄と努力の賜物だと思います。

神社とは『神の居る処』であり『人の寄る処』でもあるべきだと私は信じています。この思いは、近い将来縣神社を支えていってくれるであろう次の宮司さんや総代さんにも引き継いで頂きたいと願っています。

田鍬さん、その日までもう一踏ん張り一緒に頑張りましょう。

コロナ禍の一年を振りかえって

木の花会 上田 邦夫

昨年の節分祭「奉納 オカリナの夕べ」を最後に、縣神社のすべての祭事は新型コロナウイルスの感染拡大による大波に呑み込まれ、中止を余儀なくされました。

なかでも「大幣神事」が中止になったのは残念でなりません。本来なら「疫病退散」を掲げ、宇治の町から疫病を追い払う神事なのに、なんとも皮肉なものです。

今年に入っても、コロナの猛威はいっこうに収まらず、現在（令和3年2月）も京都府に「緊急事態宣言」が出されています。

昨年末の「抹茶ぜんざいの振る舞い」や1月の「初あがた祭」、2月の「節分祭」も中止となりました。加えて神社へのお詣りや御祈祷も減り、例年に比べて賑わい少なく寂しい限りです。

そんななか、新しい試みも生まれました。

ひとつは「お香づくり」の教室の開催です。昨年11月から、神社の綏邦書院で「ほうじ茶」・「抹茶」を使ったお香づくりが始まりました。毎週土曜日、1日3回にわたって開かれ、地元の方はもちろん、観光客も参加され、たいへん好評を得ています。今年の春からの再開を心待ちにしているところです。

そしてもうひとつは、「御朱印帳」です。いまさら！という感じですが、昨今、宇治を舞台にして大人気のアニメ（京都アニメーション制



綏邦書院で開かれているお香づくり教室

作の『響け！ユーフォニアム』)のキャラクターをあしらった「御朱印帳」4種類を揃え置いたところ、注目を集め、新しい層のお詣りが増え、境内にも活気が出てきました。

今年、コロナの終息を迎え、例年どおりの「県祭り」や「大幣神事」、「献茶祭」など、祭事が盛大に行えることを切に願うところです。

『響け！ユーフォニアム』のキャラクターが使用するそれぞれの楽器のデザインをあしらった御朱印帳

